

論文概要書

「十二世紀ルネサンスの精神—ソールズベリのジョンの思想構造—」

甚野尚志

十二世紀には、ヨーロッパの基層文化を形づくるものがあらゆる面で出現する。この時代を見れば、中世都市の成立や集権的な国家の確立といった制度的な発展から、スコラ学やゴシック芸術の誕生という文化的な革新まで、多くの重要な歴史の事象が、凝縮された時間のなかにパノラマのように展望できる。ゆえに研究者にとって、十二世紀の魅力は尽きることがない。本論文は、中世ヨーロッパ文化史上の特筆すべき事象である十二世紀ルネサンスの本質を明らかにするために、十二世紀ルネサンスを代表する人文主義者ソールズベリのジョン(1115/20-80年)を取り上げ、その思想構造を同時代の歴史的・文化的な状況のなかで解き明かし、十二世紀のヨーロッパにおいて、聖職者知識人が構想した新しい知のありかたを探ろうとするものである。

とくにこれまでの研究では、ソールズベリのジョンの思想を分析するさい、政治思想史や教育思想史の文脈のなかで、彼のテキストの断片を拡大解釈することが多く、彼の思想を同時代の歴史的な文脈のなかに位置づけ、その思想の特徴を十二世紀ルネサンスの精神的風土のなかで解明しようとした研究は意外に少なかった。そのような研究状況に鑑みて、本論文では、彼が書いた『ポリクラティクス(Polycraticus)』、『メタロギコン(Metalogicon)』、『教皇史(Historia Pontificalis)』、『前期・後期書簡集(Epistolae)』といった著作のテキストを精緻に読み解き、従来の政治思想史や教育思想史の図式に捕らわれることなく、それらを十二世紀の時代状況や他の思想家との関係のなかに位置づけ、そこから十二世紀ルネサンス期に特徴的な思想のあり方を解明しようとした。そして同時に、彼のテキストの分析から、十二世紀ヨーロッパの社会の現実を読み取ることも目指した。

第一部では、彼の学問観、自然観を中心に扱い、そのなかに十二世紀ルネサンス期に開花した人文主義の理念の典型的なあり方を見ようとした。「学問観」の分析では、彼がパリの長期の勉学を行ったさいに、コンシュのギヨームなどからシャルトル学派が共有した人文主義の教養に裏付けられた新たな人間、道徳、社会、自然についての観念を受容したこと、それにもとづき『メタロギコン』で、知識と倫理のバランスの取れた自由学芸の教育と古典の研究のあり方を表明したことを述べた。同時にこれに付随する形で、これまで多くの論争がなされてきた、ジョンが師事した教師たちについて言及する『メタロギコン』二巻十章の部分も分析し、この時代のパリの教師たちとシャルトル学派との関係も詳しく考察した。さらには、ジョンの歴史思想についても扱い、『ポリクラティクス』や『教皇史』での歴史にかんする言説を分析して、キリスト教的な摂理史観とはことなる人文主

義的な歴史観がそこに表明されていることを明確にした。また、ジョンの自然観を知るために、彼の異教的な俗信に対する批判を考察して、その占星術的な自然認識に対する批判と、ジョンの自然観に存在する、蓋然性にもとづく自然認識の構図を明らかにした。

続く第二部では、彼の君主と国家の観念を扱った。これまで、彼の政治論の著作『ポリクラティクス』は、十二世紀ルネサンス期における政治思想の到達点、とくに十二世紀における王権と国家の理念の成熟を示すものとして理解されてきたが、この第二部では、これまでの政治思想史研究による分析の成果を十分に顧慮しつつも、詳細なテキスト分析を行うことにより、ジョンの政治論が同時代のさまざまな思想—シャルトル学派において見られる自然、道徳、社会の観念、ローマ法や教会法の理念、神学や教会論における教会観、古典の人文主義の思想—の影響を受けつつ、それらを融合して彼独自の議論を展開していることを明らかにした。

とくに彼の政治論のうちもっとも人口に膾炙した議論は、国家と人体とを比較する議論であるが、それが、これまで中世政治思想史で語られてきたように、無条件に、十二世紀における「国家の自然性」を表出した議論とはいえないことを本論文では述べた。じっさい、国家を人体にたとえ、「頭＝君主」による「四肢＝国家の構成員」の支配の正当化、および「四肢＝国家の構成員」への「頭＝君主」の十分な配慮の必要性を述べる議論は、すでに古代から存在するが、ジョンは、シャルトル学派のコンシュのギヨームから有機体比較の理念を継承し、さらに『トラヤヌスへの教え』という古典に依拠する形で、詳細な国家と人体との比較の議論にまで高めた。ジョンの議論が、中世における国家有機体論の先駆けとなる議論であり、その意味で、十二世紀におけるイングランドやフランスにおける集権的な王国の出現を反映する議論と見なされ、その意義がこれまで強調されてきた。確かに、ジョンの国家と人体との比較は、国家を自立した組織と見なすことにおいて、政治思想史上、画期的な議論ではある。ただ、そこでは、国家において「魂＝聖職者」の「頭＝君主」を監督する役割がとくに強調されていることも重要である。ジョンの国家と人体との比較は、十二世紀の世俗国家における王権と教権との調和的な共存、そして、社会の諸身分の調和的なあり方を構想したものと捕らえることがよりふさわしいことを述べた。

またさらに、彼の政治論のなかで重要な議論としては、暴君放伐論があるが、この問題でも、これまでの政治思想史で語られてきたような無条件の暴君殺害をジョンが認めたのではないことを述べた。つまり、ジョンがキケロの著作から暴君殺害の正当性を原則として受け入れつつも、聖書の教えに従い、暴君の排除を神への祈りにより達成すべきだとして、必ずしも古典古代的な暴君放伐論を受け入れず、それを最終的には拒否するという微妙な態度を取ったことを明らかにした。そこには、権威への服従を唱える聖書の理念に最終的に忠実であった、教会知識人としてのジョンの姿勢が見て取れる。この第二部ではさらに、『ポリクラティクス』を同時代の他の「君主の鑑」の著作群と比較して考察し、『ポリクラティクス』の影響下、十二世紀から十三世紀初頭に書かれた「君主の鑑」の特徴を

分析した。またさらに、『ポリクラティクス』が「君主の鑑」の著作群だけでなく、同時代の宮廷批判に分類された著作群に対しても影響を与えていることも跡づけた。

続く第三部では、ジョンの教会にかんする議論の分析を行った。まず、『ポリクラティクス』で展開される教会論を考察した。とくにジョンは、『ポリクラティクス』で同時代の聖職者の腐敗について辛辣に批判したが、そこには、十二世紀の知識人特有の人文主義的な倫理意識が見て取れた。次に考察の対象としたのは、ジョンの『教皇史』である。彼はカンタベリ大司教のスタッフとして頻繁に教皇庁を訪れ、そこで見聞した出来事を後に『教皇史』の著作で描いた。『教皇史』は、教皇庁から見た西欧の教会史であり、この著作からはエウゲニウス三世期の教皇庁のあり方を知ることができるが、そこではまた、ジョンがすぐれた人物の観察と描写を行っていることも指摘した。さらに分析の対象としたのは、ジョンの書簡集である。『前期書簡集』は、ジョンがカンタベリ大司教に奉職した時期に大司教シオボルドの秘書として活動しつつ出した書簡の集成であり、その分析から、ジョンがカンタベリ大司教座において果たした役割を分析した。続いて『後期書簡集』を扱ったが、『後期書簡集』は、ジョンがトマス・ベケットとヘンリ二世の闘争にかかわりフランスに亡命してから出された書簡の集成であり、ジョンはベケット側に立って、書簡を通じて「教会の自由」を擁護しようとした。ここでは、ジョンが書簡でどのような態度を表明したかを分析したが、それにより、ジョンが思想家として卓越していただけでなく、現実の教会政治や実践的な業務にも関与した聖職者であった側面が明らかにされた。

このように本書では、十二世紀を代表する人文主義者ソールズベリのジョンが書き残した種々の著作を分析することで、彼の多岐にわたる問題関心を浮き彫りにしたが、それらには、一定の共通する態度が見られた。それは、古典の知識とキリスト教信仰、政治と倫理、国家と教会といった一見対立する事象を総合的に論じながら、人間や社会のあるべき姿を追求する姿勢である。本書での個別の議論から浮かび上がるジョンの思想の特徴は、学問論でも政治論でも、十三世紀になってから確立する中世スコラ学の論理的な分析方法によらず、分析対象を、人間にとっての意味や価値の視点から総合的に議論しようとする態度にある。このようにあらゆる事象を総合的に論じようとする態度は、十二世紀ルネサンス期の知識人が共有する精神といってもよい。

じっさい、ジョンの思想の特徴を一言でいえば、同時代のカンタベリのアンセルムスやアベラールのような思想の革新性・独創性にあるとはいえず、むしろそこに、十二世紀の知識人が獲得しえた知識の段階とこの時代に特徴的な精神構造が、鏡のように写し出されている点に特徴がある。『メタロギコン』や『ポリクラティクス』では、十二世紀中葉の時代に、西欧の知識人が手にできたかぎりでの、多くの古典からの雑多な引用と、体系性のない議論が見出されるが、そのことについては、これまでの研究でも、ジョンの思想の重要な特徴として、しばしば指摘されてきた。たとえばホイジンガは、ジョンを「前ゴシック期の精神」を代表する人物として好意的に描いたが、彼でさえも、その論考のなかで、ジョンによる雑多で過剰な古典の引用については批判的に語っている。また『初期書簡集』を編纂したブルックも、ジョンの著作がさまざまな古今の著作の雑多な観念を集めてはい

ても、そこにはまったく体系性がないことを指摘している。

一方で、マックス・ケルナーやペーター・フォン・モースらによる最近の研究は、こうした混沌ともいえるジョンの議論や、その豊富な古典引用のありかたのなかにこそ、ジョンの思想の独自性を見ようとしている。そうした研究では、ジョンの暴君論や教権と俗権をめぐる議論でとくに顕著な、政治と社会にかかわる問題を人間の道徳や倫理の問題と公的な権力の問題とを区別せず総合的に論じる、ジョン独特の論述のスタイルについて、それを否定的に捉えず人文主義的な理念のもとに専門的な学知を位置づけようとする、十二世紀に独自の思考とする。また、彼の著作における過剰な古典引用については、ジョンが自身の論証の作法として、古典の例話を引きながら論証を行ったがゆえに、引用が過多になったという説明がなされ、それもまたこの時代に特有の議論のあり方の現れと見なされる。いずれにしても、ジョンの思想の根幹には、キリスト教の信仰に依拠しながら、人間の精神の陶冶とその倫理的な完成を第一に考える立場がある。それはまた、シャルトルのベルナルドらのシャルトル学派が共有していた理念であり、ジョンはおそらく、コンシュのギヨームに師事したさいに、そのような人文主義的な理念を学んだと思われる。

このような、古典の知識とキリスト教信仰、政治と倫理、国家と教会といった一見対立する事象を総合的に論じる思想の背景には、ジョンがパリで遊学していた時代に、知的な専門主義が台頭してきたことも見逃してはならない。この時期、アリストテレスの「新論理学」の著作が翻訳を通じて、新たに西欧世界に流入し、それとともに論理学がもてはやされるようになり、また、社会の発展は法実務への関心を高めて、ローマ法が脚光を浴びるようになる。その結果、学問の世界では、ますます、知的な専門主義の傾向が強まりつつあった。そうした状況のなかジョンは、信仰と教養を深めることを第一の目標とするシャルトル学派的な学問の理想を見失わずに、専門性の高い学科と人文主義的な教養とを、学問体系のなかでバランスよく位置づけようとしたといえる。このようなジョンの人文主義的な態度は、『教皇史』での人物描写や『後期書簡集』での友人に宛てた書簡においても顕著であり、彼の著作全体に、個としての人間の尊厳に目覚めた人文主義の精神が息づいているといつてよい。

以上のように、ジョンの思想構造の特徴は要約できようが、その上でいくつか、本論文で重要性を指摘したことがらについて概要を述べておきたい。

ひとつは、ジョンにとって、コンシュのギヨームらのシャルトル学派の影響がきわめて大きかったことである。これまで、シャルトル学派が後の世代に残した影響として考えられてきたのが、自由学芸、とくに文法学や自然学の分野での影響であり、政治や社会にかんする議論での影響は等閑に付されてきた感がある。しかしジョンの場合、シャルトル学派の自由学芸教育の理念も受け継ぐとともに、コンシュのギヨームが表明した国家や社会についての議論にも大きな影響を受けており、ジョンの政治論は、コンシュのギヨームとの出逢いがなければ深まることはなかったであろう。

さらにもうひとつは、『ポリクラティクス』の政治論の重要な点は、国制にかんする議論が道徳論や倫理学と深く結びついていることであり、とくに政治の諸問題を、君主の倫理の側面から考察しようとした点である。その点で、ジョンの思想に対するキケロの影響

を強調しておきたい。プラトンやアリストテレスが、ジョンの思想に影響を及ぼしていることは、これまでの研究でも明確に指摘されてきたが、一方で、キケロが、ジョンの思想構造において果たした役割について指摘する研究は少ない。その理由は、プラトンやアリストテレスの哲学が、その宇宙論や論理学の方法などで、キリスト教神学の体系化に深く影響を与えたのに対して、キケロなどのローマの古典は、その関心が主として人間の実践的な道德哲学にあり、キリスト教神学の体系化に寄与するところが少ないと見なされたからであろう。

しかしジョンのような十二世紀ルネサンス期の人文主義者にとって、キケロの思想が及ぼした影響は過小評価できない。中世社会が新しい飛躍をみせ、新しい倫理、人間観が求められた十二世紀ルネサンスの時代、キケロの『義務論』や『友情論』に表された道德哲学は、知識人たちの間で、人間の従うべき倫理の手がかりとなるものとして注目されるようになる。十二世紀においてキケロの最も強い影響を受けた思想家が、ソールズベリのジョンだといっても過言ではない。『メタロギコン』と『ポリクラティクス』では、彼がパリ遊学時代に学んだキケロの思想の影響が全体を通じて感じられるが、ジョンの思想において、とくにキケロの影響で展開された議論として有名なものは、本書でも分析した『ポリクラティクス』での暴君放伐論であろう。

ただ、ジョンの思想でキケロの影響が感じられるのは、こうした政治的な倫理にかかわることがらだけではない。キケロの哲学の根幹にある懐疑主義の精神が、ジョンの自然や世界の認識に深く影響している。キケロは、世界を支配する一定の法則の存在には懐疑的であり、世界の動きは蓋然性によってのみ語れるものと見なし、変化する状況のなかで、人間がいかにしてよりよく生きるかという主題を追求した。彼は世界を支配する不動の法則といった考え方を好まず、懐疑の精神と蓋然性の理念こそ自由な人間の主体性を認める立場と考えたが、ソールズベリのジョンはこの立場を、そのまま受け継いでいる。

十二世紀ルネサンスの時代には、アラビア語からラテン語への翻訳活動を通じて自然学の知識が増加するが、このような自然学の知識を、いかにしてキリスト教的な世界観と調和させるかという問題が聖職者知識人にとり大きな問題になっていた。この問いに対して彼が用いた方法が、キケロから学んだ蓋然性の議論であったといえる。それは、決定論的な自然理解をあくまでも否定しながら、一方で自然のなかに、一定の蓋然性を措定できる現象を経験主義的に認めていく立場である。ジョンがキケロによりつつ開いた経験主義的な自然認識の方法、あるいは、その道德哲学、蓋然性の議論の十二世紀ルネサンスにおける重要性については、これまで十分に指摘されてこなかったといえる。

さらにもうひとつ、ジョンの思想の特徴を考えるさい、十二世紀の大きく変動する社会との関連も無視することはできない。ジョンが生きた十二世紀中葉の時代、パリを中心に学問が飛躍的に発展するとともに、新しい商業的社会が成立するなかで、ラテン語の読み書きを教える教師の需要が増え、自由学芸の知識を売ることによって生計を立てる人々が多く出

現するようになる。そのような状況を目の前にして、ジョンは、知識と倫理との調和を最も重要な問題として考えていた。それは、十二世紀ルネサンス期の知識人たちに共通する知的な態度であったといえる。

現実の国家との関連でいえば、十二世紀におけるイングランド、フランスにおける新しい集権的な国家体制の成立が、王権や国家を正統化する理念を生み出すことになる。とくにジョンがかかわったイングランド王ヘンリ二世の国家がますます集権化し、統治機構が整備されてくると、同時代の知識人たちは、こぞって国家の統治のあり方について活発な議論を行うようになる。ジョンはまさに、こうした集権的な国家の勃興のさなか、古典の知識を媒介にして、古典が提示する倫理とキリスト教の信仰の両方に一致する理想的な国家のありかたを構想したのである。その議論の詳細さは、同時代のどの作家よりも卓越したものであった。とくに、教権と俗権の関係の議論では、教権の俗権に対する優位ではなく、むしろ教権と俗権との調和的な共存を求めようと姿勢が見て取れるが、そこには、叙任権闘争後の十二世紀に特有の教会論を見ることもできよう。彼は、単純な両方の権力の対立の図式に固執せず、教会が勃興する世俗国家権力との調和的共存を図ることが教会の発展にとり重要であるという立場を取った。

じっさいベケットをめぐる闘争にかかわったジョンにとり、教会と国家の関係が最大の現実的な懸案であった。ただ、彼を「教会の自由」の頑なな擁護者とだけ見なすことはできない。彼はつねに、教会の発展にとっての世俗国家の役割を理解していた。社会の安寧を導くのは世俗国家の役割であり、教会は、国家の保護のもとでこそ独立性を保つことができると考えていた。ゆえに彼は、「君主の鑑」として『ポリクラティクス』を書き、それを当時ヘンリ二世の尚書部長官だったトマス・ベケットに献呈して、国家の統治に影響を与えようとしたのである。国家なしには教会もない。彼の思想の根底には、国家の必要性が十分に前提されており、その意味でジョンは、教会が世俗国家の上に君臨することを主張する教権主義的な理念の主唱者ではない。彼は、新しい集権的な国家がもたらす民衆への恩恵を認めつつ、そのなかで教会がいかにして独立を保つことができるか、そしてそれが、いかに道徳的に国家を導くことができるかを考えていた。

したがって、ジョンの思想家としての独自性は、十二世紀の大変革期に、新しい個人、社会、国家、教会のあり方を模索したところにこそある。それは、彼がイングランド人でありながら、パリの学問世界で勉学し古典の著作への深い造詣を獲得し、ローマ教皇庁にも滞在して教皇庁の高位聖職者や古典古代の文化に出逢ったという、まさにコスモポリタンのような人生を送ったことと無関係ではないと思われる。彼は、異教の古代ローマの遺産に深く感銘を受けつつ、古典の人文主義の理念をキリスト教の信仰と結びつけ、その結合のなかから新しい人間の理想を語ろうとしたが、それはまさに、十二世紀ルネサンス期の人文主義者たちが追求した理想でもあった。その意味で彼は、十二世紀ルネサンスを典型的に代表する知識人といってよい。ジョンが、古典の知識とキリスト教の信仰とを調和させ

ながら論述した種々の議論は、その後の時代に、より精緻なものに発展していくことになる。

そして、このようなジョンの思想は、中世後期までその生命力を失わず、大きな思想的な影響を与えた。そのことは、『ポリクラティクス』の残存する写本数が十二世紀のものが六点、十三世紀のものが十二点、十四世紀のものが二十九点、十五世紀のものが五十二点としだいに数を増していることからわかる。じっさい『ポリクラティクス』は、中世後期のイタリアの法学者たちにも受容され、たとえば法学者ルカス・デ・ペンナは、十四世紀中葉に書いたローマ法の注釈書で『ポリクラティクス』での法の議論や有機体的な国家論を詳細に紹介している。さらにジョンの暴君論も、中世末の時代まで、暴君を論じるさいの基本的な典拠とされ続けた。著名な人文主義者コルツィョ・サルターティは、『ポリクラティクス』の暴君論の大きな影響を受けて、彼自身の『暴君論』（1400年）を書いている。さらに『ポリクラティクス』は、ラテン語の書物として影響を与え続けたのみでなく、十四世紀後半には俗語フランス語のテキストとしても流布した。すなわちフランス王シャルル五世が、フランシスコ会士ドニ・フルシャに『ポリクラティクス』のフランス語訳を作らせている。

このようにソールズベリーのジョンの思想は、十二世紀を越えて中世後期まで大きな影響を与え続けた。彼の思想は、古典の人文主義とキリスト教の信仰との調和を図りつつ、人間や社会のあるべき姿を構想しているかぎり、少なくとも中世キリスト教世界の知識人の世界では、現実的な意義を持ち続けたといえる。